真宗大谷派山陽教区教化委員会
広報・情報発信部門広報誌
もんじっぽう

聞十方

教区全体に声が届きますように

第6号

発行日　2020年4月1日
発行者　山陽教区教化委員長
中根 慶滋
発行所　〒670-0044
姫路市地内町1番地
Tel 079-292-3690
Fax 079-292-1747
E-mail
sanyo@higashihonganji.or.jp

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃テーマ

「南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう」

教区教化テーマ

「創造と回復
ー 温もりのあるお寺をともに！ ー」

「教区の動き」　さまざまな試み

宗門は、真宗同朋会運動の推進計画を策定し、その願いを再確認する中で、教えに出遇えた慶びが場を生み、またその場において人が育まれていく連環を生み出していくためにも、本願念仏に生きる「人の誕生」と、その人が誕生するための「場の創造」ということが必要と確認されました。

そして、二〇二三年にお迎えする宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要に向けた取り組みの中においても、更なる真宗同朋会運動の推進に資するため、「人の誕生」と「場の創造」を具体化する取り組みとして、

第一期（二〇一四～一六年度）
「自己点検と課題の共有」
第二期（二〇一七～一九年度）
「組を基軸とした僧侶と門徒の共学の場、共同教化の具体化」
第三期（二〇二〇～二二年度）
「一ヵ寺一ヵ寺に同朋の会が展開される」

を実践目標に定めています。

（『二〇一九年度真宗大谷派山陽教区事務連絡』より）

それを受けて、本部では会議を重ねて検討し、

・各部門の事業精査（只今精査中）
・全門徒大会の開催（十一月に実施済）
・帰敬式実践運動（本部委員の四寺院で、実施及び実施予定）
・同朋の会推進講座（二〇二〇年度から準備期間）

等を計画、実施してきました。

最終目標は、「一ヵ寺一ヵ寺に同朋の会が展開される」ことなのですが、そのことにつなげていくために、あらゆることを考えて、模索しているところであります

特集　「帰敬式実践運動」について

『山陽教区全門徒大会を終えて』

山陽教区　教化推進本部長　藤井　晃

教区全門徒大会が、去る十一月十六日午前十時三十分より姫路船場別院本徳寺において開催されました。当日は天候に恵まれ帰敬式受式者を中心として百六十名余りの参加でした。

日程は、参加者全員による正信偈勤行、講題

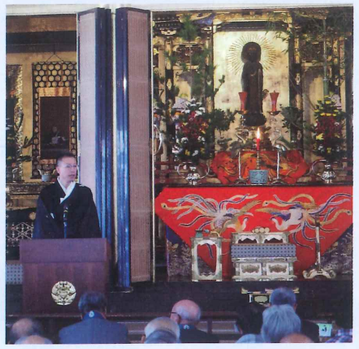
「帰依三宝の法話」、ご門徒の感話で終了いたしました。昼食のお斎は小豆粥と煮込み大根、おいしくて大好評でした。実施担当は「同朋の会推進部門」と「教化推進本部」が中心となり、みなさん共に大変なご苦労をして頂きました。また昼食は教区坊守会の皆さんが準備してくださいました。この誌面をお借りして、スタッフ、参加者の皆様に、心より深く感謝申しあげます。当日に至るまでには様々な議論の中で困難がありました。しかし、関わってくださった皆様の熱意と行動力によって無事終えることができました。重ねてありがとうございました。

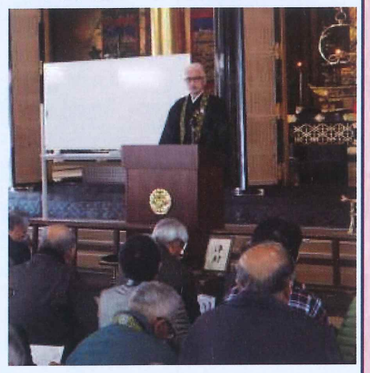
今回は、初めての全門徒大会でした。開催趣旨は、「教区帰敬式実践運動推進計画」に基づき実施したものです。一九八九年より始まった推進員養成講座、御遠忌、本山上山、手次寺院等をご縁として、帰敬式受式すなわち法名授与による仏弟子の宣言をされた方々の集いです。もちろんこれから受式される人も含めて、改めてご本尊の前で「真の仏弟子」として帰依三宝を確認する尊い場が開かれました。

特に、姫路船場別院の報恩講（十一月十六、十七、十八日）の初逮夜の前に開催しましたのは、是非とも別院報恩講にご参拝いただきたいとの願いがあります。山陽教区には三別院（姫路・赤穂・広島）があります。各別院の報恩講に合わせて全門徒大会が実施できることを願います。

教区と別院と寺院がみな朋に、親鸞聖人の念仏の教えに出遇って、一度だけの人生を私が私のままで喜びをもって完結する。それが人として生まれた意義と生きる喜びであります。

合掌


中根 慶滋 教化委員長 挨拶


藤井 晃 教化推進本部長 講話

大好評だった小豆粥と煮込み大根

臨時食堂として満堂となった講堂

御坊本堂よりみえる山門の紅葉

出席者全員によるお勤め

『心の支えになる教えを求めて』

第七組 西勝寺 門徒 木村 陽二

初めての大会で感話をさせて頂き、真宗門徒であることを考えさせられたと思います。

我家では五百年来、釈の法名をいただいております。

私個人は妻を三年前に亡くし、心の支えになる教えに出遇う為に法名を頂き、聞法は可能な限り行って来ましたが、今までのところ、中々私が生きていく上での道標になるような法話に出遇えておりません。

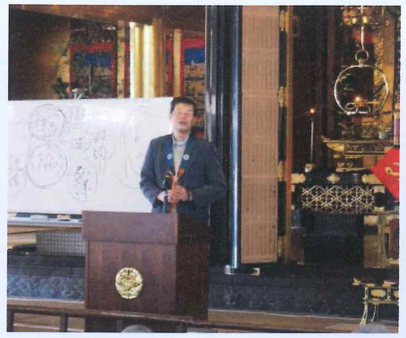
しかし、聞法は続けて行きたいと思っております。

最近「念仏」について思うことですが、別院で行われている定例法要の念仏を一緒に称え、終わった後は何かすっきりとした気分になります。僧侶の方の声が良いですが、私は息は続きません。何故ここで息継ぎをするのかといったことを知りたいものです。

長い間称えられてきた念仏について、こういう機会に色々と教えていただきたく思います。

私の中で今年印象に残った法話は「生き抜く力は、息抜く力」。つまり南無阿弥陀仏を称える事だと解釈しました。

何事にも平常心で行う、「常に念仏を称えること」だと感じました。


感話をされる木村 陽二 氏

『全門徒大会を終えて』

第三組 圓徳寺 門徒 林 忠志

今社会において人口減少が問題とされ、私たちの周辺でも地域の過疎化がすすみ、いろんな問題が生じています。

その中で人々の人間関係が弱くなっていることに対して、お念仏を通じて、目の前の人々がお互いを尊重し合い、自分自身が周囲の人々に生かされていると気付くことを願って山陽教区では「教区帰敬式実践運動計画」が策定され、継続して運動が取り組まれてきました。

そしてこの運動の一環として「教区全門徒大会」が開催されました。

全門徒大会では、藤井晃師の「わたしにって真宗門徒とは」の講題でお話がありました。人は生きていくのに、いろんな問題や悩みにであい、どう生きていくか考えています。私たちは煩悩の中に生きていますが、いつも我が身を振り返り、自分の生きている足下を見定めて、生きていくうえでの様々な問題を自分の課題として自分自身に問い続けることでないかと考えました。当日は初めての大会と聞いていましたが、参加者が会場いっぱいに集まり、熱心に講話を聞き盛会でした。

感話をされる林 忠志 氏

『帰敬式を終えて』

第一組 西寶寺 住職 正親 恒信

帰敬式を頼まれた時だけ行っていたのが、今の様に、自坊の通信で門徒さんへ呼びかけ、少人数ながらも毎年実施するようになったのは、五～六年前からでしょうか。きっかけは、団塊の世代と呼ばれる方々が定年退職され、第二の人生を歩まれるようになったことからです。「終活」とか「エンディング・ノート」とかが、世間で話題になり、法事や葬儀のあり方が急に変化しはじめた頃でした。

亡くなってからおかみそりを受け、法名をいただくという形ももちろんいいわけです。しかし、平均寿命が延び、九十～百歳まで生きられる方が増えられ、果たしてそれだけでいいのだろうかと考えるようになりました。

『帰敬式に学ぶ』

教学研修部門　後藤　功

去る、二〇一九年八月九日、第一組西寶寺で執行された帰敬式を見学させていただいた。時候は日照りが強く、汗の滲む日だった。この人間としていのちをたまわりながら、その意味をたずねることもなく、時代に流され、世間に振り回され、虚しく過ごすのではなく、生きている間におかみそりを受け法名をいただき、人間としての生き方、在り方を問う生活を始めていただきたく計画した次第です。

法名伝達

帰敬式というのは、自らが仏・法・僧の三宝に帰依し、仏弟子としての歩みを始める真宗門徒にとっての、人生の第二の誕生ともいえる極めて大切な儀式です。

寺院をお預かりする住職が、帰敬式をすることができるようになったのですから、住職の使命として大切にさせていただいております。

法話の中では、私たちが浄土真宗に出遇う、宗祖親鸞聖人にお遇いするということはどういうことなのかということをお話ししします。帰依三宝の生活をする、自分中心の生き方から南無阿弥陀仏を本尊として生活することへの転換。具体的には念仏を申す。朝夕の「正信偈」の勤行。お寺の法座への参加。報恩講へのお参り等々。先々代（正親含英）の**「真宗の修行は一生の聞法である」**という言葉を紹介し、仏法聴聞の大切さを説き、私たちが仏様から願われているということをお話し致しております。

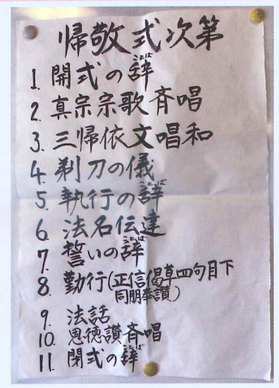
『帰敬式執行について』

第二組　龍寶寺　住職　南枝　暁

二〇一六年からお寺での帰敬式の執行を始めました。それは、本日は午後から盂蘭盆会（うらぼんえ）の法要が営まれる予定だそうで内陣が涼しげに荘厳されていた。

私が開式三十分前に到着すると、坊守さんが帰敬式の最後の準備確認をしておられた。

黒板には式次第、披露蓋（ひろぶた）には執行の辞と誓いの辞、そして肩衣（かたぎぬ）と記念品。開式十五分ほど前には受式者のお二人もお越しになり、式次第の説明が行われた。



帰敬式次第

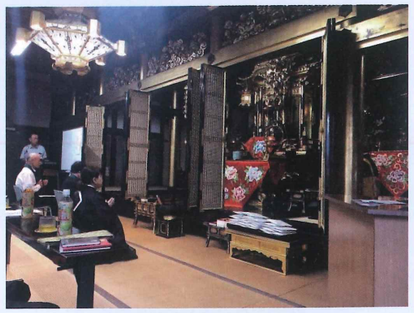
1. 開式の辞
2. 真宗宗歌斉唱
3. 三帰依文唱和
4. 剃刀の儀
5. 執行の辞
6. 法名伝達
7. 誓いの辞
8. 勤行（正信偈草四句目下 同朋奉讃）
9. 法話
10. 恩徳讃斉唱
11. 閉式の辞

式は厳かな空気の中勤められ住職による剃刀の儀、法名伝達、執行の辞、お二人より誓いの辞、そして勤行、ご法話と進んだ。ご法話の中で、「すでに往生なされたお父様お母様お二人、帰敬式を受け、聞法の生活を始められることを心より喜んでおられますよ」とお話になられたことが印象に残っている。

お二人の晴れやかなお顔を見ていると何か私も得度をさせてもらった時のことを思い出し、新たに身も心も引き締まったように思う。

私のお預かりしているお寺では、今のところ定期的に帰敬式はしていないが、これを機に総代さんにも相談して年中行事のどこかで帰敬式をしてみよう、そんなことを考えさせていただいた。

剃刀の儀



お勤めのようす

は、**「たとえ一生を尽くしてでも、遇わなければならないひとりの人がいる。それは、自分自身」**とあり、その言葉を私たちの案内チラシにも入れさせていただいており、法名をいただく式ではなく、「仏教徒の証となる式を受けると、法名が授けられる」ということは、きちんとお伝えをしなければと意識しています。

秋の彼岸会法要の二席の間に執行し、講師の先生に二席目は帰敬式法話をお願いしています。一般寺院でも厳かな時間が流れることを感じています。

『帰敬式を受けて』

第二組　龍寶寺　門徒　岩田　芙美子

お寺のお便りの中に、四年前から帰敬式の案内状を入れてくださっていて、元気なうちにお寺で法名をいただきたいと思っていました。なぜそう思ったかを、はっきり口にすることはできませんが、山まで行かなくても受式できることになり、そうなれば受式したいと言われるご門徒様がおられるのではないかと思ったことと、すでにお寺で実施されている東京教区の御寺院の案内チラシを拝見したこと、また本山からの『帰敬式執行の手引き』が届いていたこと、さらには本山での帰敬式の場に立ち会い、感動されている方々との出会いがあったからなのだと思います。

東京教区の御寺院の案内チラシに

法名は、希望を住職に相談することもできると案内状にありましたので、仏様の慈悲の御心を尋ねてゆきたい思いと、「芙美子」の一字を入れて「釋尼慈芙(じふ)」という法名としていただきました。改めて思いますと、行く先が定まったように思います。それ故に、尋ね歩いてゆけるように感じています。

法名伝達

不思議と生きる張り合いができ、力が湧いてくるのを感じています。

去年の九月に帰敬式を受け、二ヶ月後の十一月の報恩講にはぜひお参りしたかったのですが、自宅からお寺まで距離があり、冬場で日暮れが早いので、高齢の私には自信がなく諦めました。また、次の春の彼岸会法要にはお参りし、これから聞法を続けてゆきたいと思っています。

『帰敬式に立ち会って』

教学研修部門　部長　松江　長親

九月二十日帰敬式執行見学のため、龍寶寺彼岸会法要にお参りした。参拝のご門徒とお彼岸のお勤めのあとご法話をいただき、その後帰敬式を執行された。受式者は一人であったが、お一人は不安であろうとの住職のご配慮から、隣に受式者をよくご存知の方が座っておられた。

執行者は住職、係役は坊守、司会進行はご門徒。住職は受式者だけでなく参拝者にも分かるように皆さんの前で式の流れを説明し開式となった。

門徒を代表して総代さんが挨拶をされ、その後定められた通りの次第で進み、最後に住職の執行の言葉を頂き閉式となった。その後

ご法話をいただいた。

例年通りの彼岸会での執行。三名のスタッフで丁寧にされた。儀式で使用するお道具は特別な物ではなく普段お使いしているものであった。

住職と坊守だけが頑張って様々な行事を執行するのではなく、ご門徒とともに勤めていくお姿を拝見した。

参拝者からは、帰敬式を受式する姿を見て、私も受けてみたいという声を聞いた。丁寧で温かい雰囲気の帰敬式であった。

「帰敬式の執行状況と経緯について」

教学研修部門　部長　松江　長親

帰敬式に同座された同朋方

―備後組帰敬式の場合―

備後組では帰敬式を備後組宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要を厳修する機会に計画した。

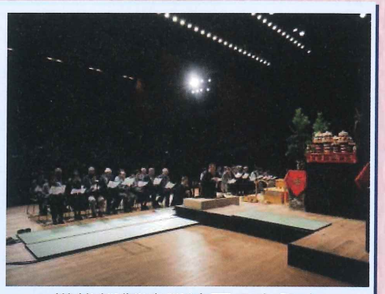
組内の寺院で帰敬式を執行された住職から「本山でお剃刀を受けられた姿を見られた方が是非お剃刀を受けたい」との声を頂いたことから計画が始まった。せっかくの機会なので門徒会員で上山されていない会員や、推進員養成講座で前期講習のみ受講され上山されていない方にも案内した。

受式者と寺族を対象とし、「真宗の教えと宗門のあゆみ」をテキストに聞法会を開催し帰敬式の意義と浄土真宗の教えを学んだ。門徒会、同朋の会、婦人会と組内寺族は御遠忌法要に向け準備を重ねる中、帰敬式の準備にも追われた。地方での帰敬式を初めて経験する者ばかりなので、受式者の動きなど失敗を重ねながら繰返し確認した。

当日は六百名収容のホールを会場に、御遠忌法要に引続き舞台上で帰敬式を執行。数百人の参詣者に見守られる中三十名の方が受式した。多くのご門徒の前で執行したため帰敬式の存在も広く周知していただいた。

法要、帰敬式、法話まで、全員で計画実行したため全体の様子が理解できた。いきなり一ヶ寺では難しいと感じるが組で協力できれば決して難しくないのではないだろうか。

法要後、仏間に法名と記念写真を大切に額に入れ、掛けている姿を拝見すると、ありがたく嬉しさが込み上げてくる。



備後組御遠忌法要のようす

「帰敬式の儀式」

教学研修部門　山科　立人

帰敬式はもともと「剃度（ちょうど）の式」と呼ばれ、通称「おかみそり」という名で親しまれておりました。「帰敬式（ききょうしき）」という呼び方は、明治九年の三月に真宗四派（大谷派・本願寺派・高田派・木辺派）で制定された『宗規綱領』で「帰敬式と改め」と記されていたことにより呼び始められました。当時の儀式執行の内容は、

帰敬式を行うや、其人をして『改悔文』を唱うる一遍せしめ、而して後、法主、観彼如来本願力の文を唱えて剃刀を施すべし

（『真宗史料集成』第十一巻三六九頁）

とあります。

現在行われる帰敬式の次第は、

「開式の辞・真宗宗歌斉唱・三帰依文唱和・剃刀の儀・執行の辞・法名伝達・誓いの辞・勤行（正信偈草四句目下・同朋奉讃）・法話・恩徳讃斉唱・閉式の辞」

となっています。

帰敬式の儀式執行について、住職が行う帰敬式の対象者は所属門徒に限り、執行場所はご門徒の所属寺院の本堂となります。ただし、病気療養中などやむを得ない事情がある場合は、住職の願い出により、あらかじめ教務所長の許可を得て、執行者・執行場所（病院・老人ホーム・自宅等）を実情に応じて行うことができます。法話は儀式執行者がつとめます。執行者とは別に掛役（かかりやく）を一名つけ、司会や進行補佐をします。装束は、執行者が直綴（じきとつ）・五条袈裟（ごじょうげさ）・半装束念珠（はんしょうぞくねんじゅ）・中啓（ちゅうけい）・白服（はくぶく）、掛役が直綴・墨袈裟（すみげさ）・木念珠（安静型）・白服。掛役が門徒総代もしくは推進員の場合は、略肩衣（りゃくかたぎぬ）・略念珠。受式者は略肩衣・略念珠着用です。荘厳は両尊前打敷、総灯明、総燃香、両尊前立燭、仏供については適時となっています。なお打敷をかける際は基本的に華束を用いますが、帰敬式のみ執行の場合は華束を用いません。

三帰依の文章は、『華厳経』の「浄行品」の偈によるもので、前後の文章は異説もあるようですが、廃仏毀釈の時代に護法運動に挺身した大内青巒という方が仏典にもとづいて作成されたと言われているようです。

剃刀の儀とは髪をおろすことを表現した儀式です。利益を欲しがる「利養」・名声を求める「名聞」・人と自分を比べて勝っていたい「勝他」の三つの髻（もとどり）を断ち切ることを表すため、中心・左・右の順で手前から奥に向かって三回剃刀を頭に当てます。現在は実際に髪を剃ることはありませんが、頭に剃刀を当て「おかみそり」を表現しています。

法名については『稟承餘艸』（ほんじょうよそう）に、

当家の法名は、通仏法の軌則を持って名を釈氏にかるのみ。坊主分のものは法名・実名の二つを名づく。在家も貫主より剃刀頂戴のとき法名を拝受するの法則なり。もし存日に遑なくて死亡の者は、手次道場の僧分より剃刀の式を授かり、本山に礼物を捧げ必ず法名を戴くべきなり。これ非僧非俗の儀式、辺鄙の在俗まで一味平等ならしむるの法則なりと伝うる所なり。

（『稟承餘艸』法名授与之事）

とあります。また、法名という名前の由来は、霊芝（元照律師）の『観経義疏』や『智者大師伝』などに出ていて、「出家法名法蔵」とあり、そこから用いられるようになったようです。

帰敬式という儀式は、仏法を訪ね自らの人生を問い直す、新たな人生の一歩を踏み出すための儀式です。執行者としても、私自身の生き方としても、大切に受け止めていくべき儀式であります。

「帰敬式の意義について」

教学研修部門　玉光　真人

帰敬式を授式するについて大切なことは帰依三宝ということと法名をいただくということです。

帰依三宝とは、仏法僧に帰依するということで、これは浄土真宗のみならず、全ての仏教徒に共通することです。

仏法僧とは一般的に、覚った人、教えを説く人としての仏、教えの内容である法、そして教えを中心とした共同体である僧伽としての僧のことですが、真宗においては、帰依三宝は南無阿弥陀仏におさまると言われます。それは具体的には、仏とは南無阿弥陀仏を私にまで届けてくださった釈迦・諸仏、法とは言葉になった法としての南無阿弥陀仏、僧とは南無阿弥陀仏を通して私が出会う人たち、すなわち御同朋、御同行のことを言うのでしょう。

そして、帰依とはそれを自らの依りどころとするということですが、簡単に言えば、私の中心に南無阿弥陀仏を据えるということです。家であればお内仏が、ご本尊が家の中心になるということであり、生活の中心になるということです。

またそれは、親鸞聖人が「仏に帰依せば、終にまたその余の諸天神に帰依せざれ（化身土巻末）」と言われているように、念仏以外のものを依りどころとしないということでもあります。単に他の宗教に頼らないというようなことだけではなく、私達が日常の意識で持っている、良い人だと思われたい（名聞）、もっとお金が欲しい（利養）、他人の上に立ちたい（勝他）といった欲望（三つの髻）を断つということでもあります。もちろん、そのような欲望が完全になくなるわけではありませんが、私にとって本当に大切なことは南無阿弥陀仏と称名念仏し、念仏の声を聞き、念仏の教えにしたがって生きていくことだということをはっきりさせることが真宗における帰依三宝ということです。

法名とは釈○○、釈尼○○という形式の、仏弟子としての名前のことを言います。戒名も仏弟子としての名前ですが、戒名が戒律を守ることによって仏弟子となる名前であるのに対し、法名は法を聞き、法を生きることによって仏弟子となることを意味する名前です。法とはもちろん念仏（南無阿弥陀仏）のことです。

私達は誰しも名前（俗名）を持っていますが、俗名が親からの願いを受けた名前だとするならば、法名は仏からの願いを受けた名前と言うことができます。法名をいただくとは、私達が自らを仏の願いを受けた存在として自覚し、仏の願いを私自身の願いとして生きていくということでもあります。

ですから、亡くなってから法名をいただくということではなく、生きている今、法名をいただき、仏弟子として自覚的に生きるということが、真宗門徒としての本来のあり方だと言えます。そのことにより、お金や名誉、権力といったことに頼らなくても生きていくことができる、自分がどうしようもなくなった時にも絶望することなく生きていくことができるのではないでしょうか。南無阿弥陀仏という畢竟依（究極の依りどころ）をもった生き方が始まるのです。

剃刃（おかみそり）

編集後記

三年前、広報部から声がかかり、関わらせていただくこととなりました。難しいだろうからという理由で、それまで全くホームページなど作ろうとも思ったこともなかった私でしたが、気づけば「ワードプレス」の普及により、簡単にホームページが作成できる時代となっていました。自坊のホームページを実験台として、他教区のホームページを参考にしつつ、よちよち歩きながら、部員とともにデザインや内容をそれなりに作ってきたように思っております。

データを更新するのは手間のかかることなのですが、閲覧してくださる方がおられるので、それはありがたいことであります。

ただ、残念なこともあります。Ｈｐを見てくれる人があまりにも少なすぎるということです。

教区の会議においても、また、組の会議においてもＨｐの話をしても、一割から二割程度の方しか閲覧されていないのが現状であろうと感じられ、とても寂しく思うこともあります。

正直なところ、なんとかならないのかなあって思ったりもします。

ところで、このホームページというのは、とても便利なツールであります。各種の書類の書式や写真などを貼り付けたりしておくと、誰もがそこからダウンロードをして使え、便利になります。

気が付いたことを更新していけば、どんどん内容を充実させていくこともできます。

また、質問や問い合わせがあっても、「Ｈｐに書いてあります」と答えれば、適切に伝えることが可能になります。

閲覧者や利用者が少ないと言うことは、内容を興味深いものに変えていく努力の必要性もあるのですが、今は、時代と共に少しづつ変わりゆく過渡期だと思うようにしております。

『聞十方』は、発刊してはや三年がたちました。今期の広報部にとっては最終号となります。少し早いですが、お読みくださったみなさま、本当にありがとうございました。

合掌　（部長）